



第4号
令和8年6月8日

国際教養科主任
水野豪人

1年3組山崎渚音(しよおん)君がトビタテ！留学 JAPAN に採用される快挙！高い志から刺激を受けよう！

国際教養科から、また一つ大変喜ばしいニュースが届きました。1年3組の山崎渚音くんが、文部科学省が主催する「トビタテ！留学 JAPAN 新・日本代表プログラム」の第11期生として見事採用されました。全国の優秀な学生が集う中、非常に高い倍率を勝ち抜いての採用です。山崎くんは、恵庭市とニュージーランド・ティマル市との姉妹都市交流を自身の手で再び活性化させたいという、熱意あふれる自主企画を提示し、高く評価されました。教養科の仲間がこのような素晴らしい挑戦をし、快挙を成し遂げたことを誇りに思うと同時に、皆さんも彼の志から多くのことを学び、刺激を受けてほしいと願っています。

~The summarized message of Mr.Yamazaki~

- 減少傾向にある恵庭市とティマル市の姉妹都市交流を、自分の手で再び活発にするために応募。
- 7月からニュージーランドへ渡り、現地校での日本文化紹介や esports 大会の開催に挑戦。
- 帰国後には両都市をオンラインで繋ぐイベントを計画し、仲間へも一歩を踏み出す大切さを発信。

特集インタビュー：世界へ羽ばたく日本の大使として

受験期のひらめきから姉妹都市交流への想いへ

水野：山崎くん、第11期「トビタテ！留学 JAPAN」の採用、本当におめでとうございます！まずは、選ばれた今の率直な気持ちを聞かせてください。

山崎：ありがとうございます。合格をただけて本当に嬉しい気持ちと、いよいよ留学が始まるという緊張感が混ざり合っているような状態です。

水野：このプログラムに応募しようと思ったきっかけ



は何だったのでしょうか。

山崎：中学3年生の受験勉強をしていた時期に、父からこのプログラムの存在を教えてもらい、興味を持ちました。自分がこれまで恵庭市で関わってきた国際交流の経験をそのまま活かし、さらに発展させることができるのではないかと思い、挑戦を決めました。

水野：具体的には、現地でどのような活動をしたいと考えて計画を立てたのですか。

山崎：恵庭市と姉妹都市の関係にある、ニュージーランドのティマル市との国際交流に貢献したいと考えました。私は以前、恵庭国際交流プラザでティマル市の方々と文化交流をする機会がありました。その際、日本側は伝統的な折り紙やアイヌ文化を紹介し、ティマル側からはマオリ族の伝統的な踊りである「ハカ」を披露してもらいました。日本の静かな舞踊とは違い、とても勢いがあって圧倒されたことを今でも覚えています。私は大声を出すのが少し苦手なので一緒に踊れなかったのですが(笑)、その素晴らしい交流が強く印象に残っていました。

esports を武器に、現地と日本を繋ぐ自主企画

水野: 素晴らしい原体験ですね。実際の渡航期間はいつからですか。

山崎: 今年の7月13日に日本を出発し、8月15日までの約1ヶ月間、現地に滞在する予定です。

水野: 1ヶ月間の留学ですね。トビタテ留学 JAPAN は、自ら現地での活動を組み立てる「自己企画型」が特徴ですが、どのような取り組みを行うのですか。

山崎: 現地のオピヒ高校に通う予定ですが、そこで日本の文化を伝えるだけでなく、私自身が関心のある「esports 大会」を企画・開催します。まずは1クラス単位の規模から実施する予定です。具体的にどのタイトルを使用するかは検討中ですが、既存のゲームだけでなく、自分が制作したプログラミングなどの要素も組み合わせていければと考えています。

水野: 留学中だけでなく、帰国後の活動も重要視されるプログラムですが、その後の計画はいかがですか。

山崎: 帰国後の8月後半から9月頃にかけて、「dokidslab」(恵庭にあるプログラミング教室)の協力を得ながら、恵庭とティマル市をオンラインで繋いだ esports の対戦イベントを開催したいと考えています。姉妹都市交流協会とも連携して参加者を募り、ニュージーランド側で30人、日本側でも30人の合計60人規模のイベントにすることが目標です。

日本のアンバサダーとして、国際教養科の仲間へ伝えたいこと

水野: 今回の留学は、日本の代表(エヴァンジェリスト)として赴くという意味合いも含まれています。現地に何を伝え、日本に何を持ち帰りたいですか。また、教養科の仲間たちにはどのような影響を与えたいですか。

山崎: 現在、恵庭市とティマル市の行き来や交流人数は以前に比べて減少してしまっています。私のこの活動を通じて、両都市の交流が再び活発になり、将来的に往来する人が増えるきっかけになれば嬉しいです。教養科の仲間たちには、帰国後にプレゼンテーションを行う予定です。日本でただ机に向かって授業を受けるだけでなく、留学という経験を通して学ぶことの価値を伝えたいです。現地へ実際に足を運び、その土地の空気を肌で感じることで、物事をより深く理解できるようになると信じています。

水野: 現在、円安や国際情勢、コロナ禍の名残りなどもあり、日本の若者の留学数が減少しているという社会課題があります。この現状について、同世代の学生たちに対して思うことはありますか。

山崎: 機会があれば、ぜひ自分から積極的に留学へ挑戦してほしいと思います。もし「海外へ行くのはまだハードルが高い」と感じるのであれば、まずは地域の国際交流ボランティアに参加することから始めてみるのがおすすめです。身近なところからでも、十分に世界と繋がる一歩を踏み出せると思います。

水野: 国際教養科に入学して2ヶ月が経ちましたが、これまでの学校生活はいかがですか。今回の挑戦との結びつきも含めて教えてください。

山崎: この2ヶ月間、本当に楽しかったです。クラスメイトと日常的に英語で会話ができる環境があり、中学校の頃よりも英語を話す量も質も格段に上がったと感じています。先日行われた台湾の高校とのオンライン交流会でも、お互いの好きなことについて英語でフリートークができて、とても良い経験になりました。今回の留学を通じて得た経験を、これからの教養科集会などの場でしっかり発表したいです。少し緊張するとは思いますが、SDGsをはじめとする世界の課題について、自分の言葉で世界へ向けて英語で発信できるよう、さらに学びを深めていきたいです。

水野: 頼もしい決意ですね。山崎くんのこれからの挑戦と活躍を、学科全体で応援しています。今日は本当にありがとうございました。体調に気をつけて、事前準備も頑張ってください。

山崎: ありがとうございました。精一杯頑張ってきます！

